不思議な安心感

（ん・・・ここは・・・？）

ゆっくりと目を開けると、水の中にいるようなぼやけた世界が広がっていた。それらは意識がはっきりとしてくるにつれて立体的になり、輪郭が形成されていく。天井と目が合い自分が寝そべっていることを知る。視界の端でこちらを覗き込むように見下ろしている誰かの存在に気づき、紅蘭はハッと息を呑んだ。

「おはようございますっ！目が覚めましたか？」

番才はさらに身を乗り出し、意識が回復しているかを見定めようとする。紅蘭の口から「ひっ！」っと声にならない声が漏れた。男の人だと認識した瞬間に全身が強張り、鼓動が激しくなる。自分が下になっている現状がさらに恐怖心に拍車をかけ、紅蘭は薄い掛け布団を自分に手繰り寄せながら上体を起こし、目を見開き拒絶を示した。

「あっ・・・いや、それだけ動けるのなら問題ありませんね。」

番才は正座の体勢に戻り、気まずそうに頬を掻いた。目が泳ぎさらに少しだけ後ろに下がった紅蘭は、頭に敷いていた薄い枕も護身用に自分に引き寄せている。

「仏蘭・・・仏蘭はどこですか？」

布団越しにくぐもった質問を番才に投げる。

「わたしならここにいるわよ。」

敷布団の頭の先の畳の上に、真っ白なドレスを身に纏った人形が座っていた。

「仏蘭っ！」

「元気そうでよかったわ。傷は痛む？」

その言葉を聞いて、紅蘭は自分の身に何が起こったのかを思い出す。

「えっ・・・そうだよ仏蘭っ！わたしたち階段から落ちて、あの二人がこっちに向かってきてたの！」

四つん這いで近づきあの時の現状を伝える。

「ええ、わかってるわ。それであんたは怪我

をして気を失って、そして今こうして元気に目覚めたのよ。」

両脇から身体を抱えられ胸に抱き寄せられる。

仏蘭の頭に紅蘭の顎が擦り付けられていた。

「わたし、怪我してたの？」

「そうよ。結構酷かったわ。二人とも歩けないほどにね。」

落ち着いた仏蘭の喋り方に、紅蘭の興奮も少しずつ治まっていく。

「二人とも？仏蘭っ！あなたもどこか怪我したの！？」

今度は腕を伸ばし全身を正面から見られる格好にされ、前後に激しく揺さぶられる。

「今から説明するから落ち着きなさいっ！」

畳に下ろされた仏蘭は、乱れた髪を戻しながら番才の方へと歩き始めた。

「階段から落ちて床に転がっていたわたしたちを、番才と、そしてあの二人が助けてくれたの。」

正座してこちらを見つめる番才の足の横で腕

を組み、仏蘭は「だからお礼を言いなさい」と言うような視線を紅蘭に向ける。

「あっ・・・あの・・・ありがとう、ございます・・。」

目は合わさず顔も布団で半分覆って感謝を伝える。

「いえ。気にしないでください。怪我を治したのはわたしではありませんし、一人ではどうしようもありませんでしたから。」

ちらちらと見つめる限りでは、真っ直ぐにこちらに視線を向けてきている。その視線を頬で受け取り、紅蘭は小さく頷いた。

「それでは仏蘭さん。わたしはこのことを女将さんに伝えてきます。それと、美禄さんと雷鼠くんにもお伝えしておきますね。」

「ええよろしく頼むわ。わたしはこの子にいろいろと説明しておかないといけないし。」

番才は紅蘭に軽く会釈をしてから、静かに部屋を後にした。

「さーて。何から話そうかしら。いろいろ

ありすぎて順序がめちゃくちゃになりそうだわ。」

腕を組む仏蘭は顎を触り何かを思い出すように畳と天井を交互に見つめている。

「仏蘭。あの後一体何があったの？わたしたちはどうなってたの？」

布団を顔から外し、紅蘭のきめ細かい髪は肩から顔の真横に流れる。淡く美しい色合いの浴衣は、新品のようにきれいに染まっている。

「あなたは頭を強く打って気を失って、わたしは階段から落ちる中で足と腕の片方ずつが壊れたの。おまけにあんたを助けようと近づいて、あんたの血でドレスは台無しになったわ。」

そのような大惨事になっていたのだと、当事者だが素直に驚いた。しかし、本当にそんなことが起きたのだと実感することができない。

現に頭は痛くないし、浴衣は血に染まっていない。仏蘭はいつものように真っ白なドレスを着て腰に黄色いリボンを巻き、頭には白い

薔薇の髪飾りをこさえている。しかも両足で立ち腕は自由に動いているように見える。

「それを偶然番才が見ていたのよ。あいつもあいつで満身創痍だったけど、駆けつけてくれて、美禄って方と雷鼠って子も一緒にいってわたしたちを介抱してくれた。わたしたちが勝手に驚いていただけで、あの金髪の子と和装の女性はここの宿泊者だったってわけ」

最後にぼやけた世界に現れた二つの影の正体が、仏蘭が口にした二人だったのだと事実と記憶が一致した。紅蘭は頭の整理ができたと伝えるために、待ってくれている仏蘭に視線を投げる。

「ここからがどうやって説明したらいいものか悩むのよねー。」

仏蘭は困ったような、だがそれでもどこか楽しそうに何かしらを思案している。

「結果的にあんたの傷は癒えたの。それも、不思議なお湯に浸かっただけでね。」

「むふふ」となぜかこちらに向けて笑みを向

けてくる意味が理解できず、紅蘭は「不思議なお湯？」と真剣に聞き返す。

「そうよ。あの和装だった美禄って方が一緒に大浴場の浴槽まで着いて来てくれてね、そのお湯にあんたを浸からせて、傷口にそのお湯をかけるとあら不思議っ！みるみるうちにあんたの出血は止まるわ傷は消えるわ、おまけに小さな傷や青く染まっている打撲の跡もきれいさっぱり治ったのよ。」

興奮する様子の仏蘭の話し方に嘘を感じない。そんな魔法のような、現実離れしたことが自分の身に起きたのだとすぐに受け入れることはできないが、全身の痛みのなさがそれを証明してくれている気がして、なんだかむず痒い。

「それにあなた、結構出るとこ出てるのね。顔だけじゃなくて女としても一級品じゃない」

「へっ！？」

真面目にことのあらましを理解しようとしているからか、仏蘭の言っていることの内容が

想像できない。しかし、思考が傷を癒した方法にいきつき、大浴場と仏蘭の言った言葉を思い出すと、紅蘭の顔は一気に紅潮した。

「ちょ、ちょっとっ！何？あなた見たの？」

思わず布団を引き寄せ浴衣の上から身体を隠す。

「むふふふふ。色も白いし、あれは男がほっとかないのも無理はないんじゃない？」

「サイテー！エロ人形！ちょっとでも感謝したわたしがばかだったわ！」

紅蘭の投げた枕を華麗に避けた仏蘭は「おほほほほ～」とその枕に飛び乗り笑った。

「まあ落ち着きなさい。話はまだまだ続きがあるのよ。」

「うるさいっ！ばかっ！」

少しでも見られるのを避けようと半身になった紅蘭は、特大のため息をつく。

「それからあんたに服を着替えさせる時に、これまたすごいことが起きたのよ。」

顔だけを仏蘭に向ける。

「望鏡の間にあった着せ替え鏡の謎は、やっぱりわたしたちの推測で間違ってなかったのよ。」

膨れっ面だった紅蘭の顔が元に戻った。

「鴨と熊の証言通り、鏡の中にいたあんたを吸い込んだやつは、〝依飾（よるしか）〟ってお化けだったのよ！あの鏡自体が〝擬衣（ぎごろも）〟の鏡〟って言うらしくて、ななんとっ！携帯できるのよ！」

一度で理解できる話ではない。「ぎ・・・ぎご？えっ、何？」と紅蘭は説明を促す。

「だからね。あの擬衣の鏡って鏡の中には、依飾ってお化けと、あと〝女冥（めいめい）〟って女がいて、そいつらが鏡の中で着せ替えをしてたってことよ。鴨と熊が言ってた『紅蘭さんが鏡の中に吸い込まれて出て来た』ってのは本当だったのよ。それで、その二人は鏡の・・・世界ってところにいて、鏡の中だったらどこにだって移動できるの。気を失っているあんたに女将が渡してくれた手鏡をか

ざしたら、あんたは素っ裸の状態からまた元の浴衣姿に戻ったってわけ。」

仏蘭自身も混乱しているのだろう、妙な興奮の仕方がそれを物語っている気がする。

「仏蘭さん、入ってもいいですか？」

廊下から番才の声が聞こえた。一度考える時間が欲しいと思っていた紅蘭は少しだけほっとする。もしかして番才にも身体を見られたんじゃないかと思うと、余計に顔を合わせ辛くなっていた。

「いいわ。」と仏蘭は軽快に答え、開いた襖の先には番才以外にも人が立っていた。

「紅蘭さんが大丈夫そうなら、カウンターまで下りてきて欲しいと女将さんがおっしゃってました。」

「なによ、いくら怪我が治ったからってこっちは病み上がりよ？そっちからこっちに来なさいっての。」

再び腕を組み仏蘭は気に食わないと言わんばかりに不満を露わにする。

「まあいいわ。紅蘭は元気そうだし行ってあげる。あっ、それと紅蘭。この方が美禄さんと雷鼠くんよ。」

振り返りそれぞれを紹介する。

「はじめまして。美禄です。無事目が覚めたみたいで安心しました。」

丁寧に頭を下げる能の仮面をつけたような和装の女性に、紅蘭は釣られて丁寧に頭を下げる。

「お姉ちゃん大丈夫だった？いきなり階段から落ちちゃうからぼくびっくりしたよ。」

隣の金髪の少年も、こうやって対面するとただの少年にしか見えない。「あっ、うん。」と短く返事をした紅蘭は、先ほどの仏蘭との会話で出てきたからか、美禄の抱えている鴨の存在に気づいた。

（あっ、鴨・・・。）

「あれ？ねえ仏蘭。熊は？」

美禄は一体しか持っていない。

「熊は・・・いないわ。」

「えっ！？なんで？」

「わたしたちが逃げている時にどこかに落としたみたいよ。後で美禄さんに探しにいってもらったけど、どこにも落ちてなかったって。たぶん誰かに拾われて・・・いると思うわ。」

背中に挟んでいたからか、あの時、どのタイミングで熊の感触がなくなったかなんて覚えていない。

「そんな・・・。」

紅蘭の胸の奥を少しずつ自責の念が蝕んでいく。目覚めたばかりでわからないことだらけな上に、知らない人との関わりが増え、ただでさえ不安定だった心はその振動に耐え切れなくなりかけていた。

「大丈夫よっ！」

自分を責める霧のような自分自身の声を掻き消して聞こえてきた仏蘭の声に紅蘭は顔を上げる。

「ここで起きたことは全部まるっと解決できるわ。そして、それを実行に移すための話

し合いを今からするの。雫も熊も、そしてあなたも絶対にわたしが助け出してみせるから安心しなさい！」

この場で一番小さな宿泊者が、なぜだか自分よりも大きく見えた。

〜続く〜